

クラブに燃える

夢のような暇高祭が終わり、高校生活における行事もあとわずかとなりました。もの寂しさを感じる反面、高校での思い出はますます増えてきていることでしょう。君たちにとって、その最たるものがクラブ活動での活躍だと思えます。クラブでの思い出は生涯忘れられない宝物。ほんの一部ではありますが、本当にクラブを一生懸命頑張ってきた人たちにしか書けない本物の体験を紹介します。

後悔という大きな経験

女子バスケットボール部

2年の11月。普段は練習時間の短い私たちバスが最も忙しくクラブ生活を送った時期だった。公式戦ではないけれど、一つの大会が1ヶ月に渡って行われた。6時間授業の日は朝練をし、毎日早弁をして昼練をし、放課後ももちろん練習。日曜日は、1日に2ゲーム分走り回る。そんなバスケット漬けの日々を送った。夏の大会での初戦敗退から、気持ちを入れ直すと、練習の雰囲気や声は一変した。全員が練習に集中できていたと思う。

その結果、忙しかったこの時期は私たちが最も輝いていた時でもあった。去年以上の成績を目標に大会に挑んだ。戦力がだいぶ落ちたと言われていたけど、目標は見事に達成することができた。同じような実力の相手に粘り勝つということも経験した。

しかし、春の大会では2回戦敗退。1回戦、私は自信のあったシュートが全く決まらず、チーム全体としても最悪の試合内容だった。大事な時にチームに貢献できなかった自分が情けなくて、それでも勝たせてくれた仲間に感謝して、試合後一人で涙を流した。十分に悔しい思いをし、勝つつもりで迎えた2回戦も満足とは言えない内容だった。それが、私の引退試合になった。敗因は、練習が全てだったと思う。11月の大会前とは違い、どこかダラダラした練習になっていたことは事実だ。そんな雰囲気にしないのが私の仕事だったのに、見て見ぬフリをしてしまうことも多かった。メンタルが鍛え切れていなかったのは最後の大会でわかった。上を目指した練習はもっともっとできたと思う。11月の大会の勢いを最後の公式戦で発揮できていれば、勝つのもう1試合できたはずだ。

後悔の思いでいっぱいだった時、先生がかけてくれた言葉がある。「人間、後悔のない人なんていない。だから、これからの人生、後悔することが少しでも減らせるように努力すればいい。」

2年というクラブ生活を通して得たものは本当に大きかった。もちろん、2年間の全てが後悔ばかりではない。でも楽しかった2年間の中には、こんな経験もあったということをお忘れず、これらにつなげていきたい。

チームになること

男子バスケットボール部

僕たちは結局、公式戦では1勝しかできなかった。部員には経験者が多く、1年の時から先輩の試合に出場していた者もいて、絶対に勝ち進めると思っていた。けれども、夏の大会も冬の新人戦も1回戦敗退。先生にはずっと「チームになれ」と言われ続けてきた。一人ひとは一生懸命頑張っている、けれどもつながっていない、と。そのことは実際に、試合中でも練習中でも感じていた。苦しい場面、肝心な場面で声がかからない。その状況を打破しなければ勝つことはできない。最後の1ヶ月はそこに重点を置いて練習した。

僕自身、最後の1ヶ月は一番考え、悩んだ時期だった。キャプテンとしてどんな発言、行動をし、チームをどうまとめていくか。練習の計画。一人ひとりが力を発揮するためにはどうすれば良いか。最後の試合まで日が近づくにつれて皆のモチベーションが上がるも、密度の濃い練習まで中々持っていけない。誰かに頼ろうとする自分に苛立ちを感じた。徐々に改善はできたと思うが、完全にという状態まで仕上げることはできなかった。

迎えた最後の大会、初戦、競りながらも初勝利をあげることができた。そして2回戦。結果は1点差の惜敗であった。だが、自分達の持っている力を出し切ったベストゲームだった。もちろん、悔しさはあった。なぜ勝ちきることができなかったのか、気持ちで負けていたのか、いろいろと後悔もあった。けれども、今まで追い求めてきた「自分たちが持っている力を全員が出し切る、引き出す」ということができた充実感の方が、僕には大きく感じられた。

僕の高校での部活は公式戦1勝という不甲斐ない結果に終わってしまった。しかし、結果より大きな経験ができたと思う。チームの中心として皆を引っ張ることの難しさ。苦しくても支えてくれる仲間の大切さ。そして何よりも皆が一つのことのめり込んで気持ちが一つになった時の力の大きさを実感できた。先生がいう「チーム」になれたかどうかはこの二年間ではわからなかった。けれども、最後の試合で感じた一体感はその答えの一つだと僕は思う。

野球部より お知らせ

いよいよ三年生最後の夏の大会が始まります！

1回戦 7月13日(日)11:10～ vs 北淀高校 於 万博記念公園